（様式２）

授 業 改 善 プ ラ ン

地域名	南房総教育事務所	学校名	袖ケ浦市立昭和小学校

１．課題（これまでの全国学力・学習状況調査結果等から）

○令和元年度全国学力学習状況調査の結果では、書き出しの言葉に続けて４０字以上７０字以内で書く問題は、約３割の正答率だった。条件に合わせ、文章を要約する力が身についていない児童が多い。県学力検査（令和２年度実施）の結果を見てみると、どの学年でも、どの教科も、「思考・判断・表現」の正答率が「知識・技能」の正答率を下回っている。本校の児童は、基礎基本はできているものの、身につけた知識や技能を活用して考えたり、広げたり、表現したりする力はまだ十分ではないと言える。

２．取組のポイント（仮説、改善方法等）

○研究主題を「『主体的・対話的で深い学び』を実現する学習指導の在り方～『思考し、表現する力』を高める国語科の授業改善を通して～」とし、仮説を「国語科の学習において、『目的や意図に応じて、自分の考えを明確にして書く』学習活動を位置づけることで、読む能力及び書く能力が向上し、思考力・表現力を高めることができるであろう。」と立てて、授業改善を図っていくこととした。

３．具体的な実践

①理論研修

○南房総教育事務所　碇山智生指導主事から「確かな学びのためにどのような授業をしたらよいか」「国語ＴＴのあり方」について、講義を受け研修した。

○指導案の形式、書き方について授業研講師からのアドバイスや資料提供を受け、先行研究を参考にして話し合い、書き方を学んだ。

○児童の実態調査の取り方について、学年ごとに話し合い、ちばっ子チャレンジ１００や学びの突破口ガイドを活用して、問題を作成した。

②全国学力・学習状況調査の問題や結果の分析

○　５月…実際に問題を解いて、出題の意図や問題の難易度、児童が躓きそうなところを把握。
子供に付けたい力やその力をつけるための手立てについて話し合った。

○１０月…結果分析。条件に合わせて文章を要約する問題（面ファスナーの設問）の正答率が低く、設問から必要な情報の一部しか見つけることができなかった児童が多かった。

③継続した「書く活動」の検討・実践

「書く活動」を年間通して継続的に行い、表現力・判断力・思考力につなげていく。

低学年…教科書の「てびき」活用、ちばっ子チャレンジ１００、行事の後に短作文、日記など。

また、書くためには音読も大切ということで、音読にも力を入れて取り組んだ。

高学年…教科書の「書く活動」に条件（字数など）をつけて書く、学調の過去問を解く、ちばっ子チャレンジ１００、週末に作文や日記の宿題、行事の後に短作文など。

書くことが嫌いにならないように、書く内容や形式・量などは児童の負担にならないよう工夫して取り組ませた。

④授業研究（年間４回、全員授業）

高学年部会と低学年部会に分かれ、授業改善を図れるよう、単元を考えた。指導案作　成の際は「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」の「見出す」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」の過程を指導の重点として、学習活動を考えるようにした。また、指導計画（特に本時）には必ず「書く活動」を組み込み、仮説を検証することとした。

また、特別支援学級も国語の授業研に取り組み、児童個々の実態に応じた指導法を研究した。

４．成果

○児童の実態や課題を把握し、学習改善への方向性が明確になった。

“「書く活動」を中心に取り組む”　”主体的・対話的で深い学びを意識した授業作り”

○継続して「書く活動」に取り組んだことによって、児童が書くことに慣れてきた。抵抗がなくなってきた。

○授業研究を行うことで、単元を通して「思考力・判断力・表現力」を高める方法を担任一人一人が考え、試行錯誤しながら実践することができた。

○各学年の実態調査から、観察の視点形成・理由を考えて書く・情報読み取り・メモからの文章化・スピーチの観点形成・内容要約・話の展開に沿った質問・意見形成・意見比較といった思考力・判断力・表現力につながる力が伸びてきたことがわかった。

○国語ＴＴによって、個に応じたきめ細かな指導ができた。

◆担当指導主事から（南房総教育事務所　指導主事　碇山　智生）

○児童の実態や課題をもとに身に付けさせたい力を明確にして言語活動を設定していた。

相手意識、目的意識を明確にして授業づくりを行ったことで児童が主体的に学びに取り組むことができた。